

情事
明治
太平
記



214

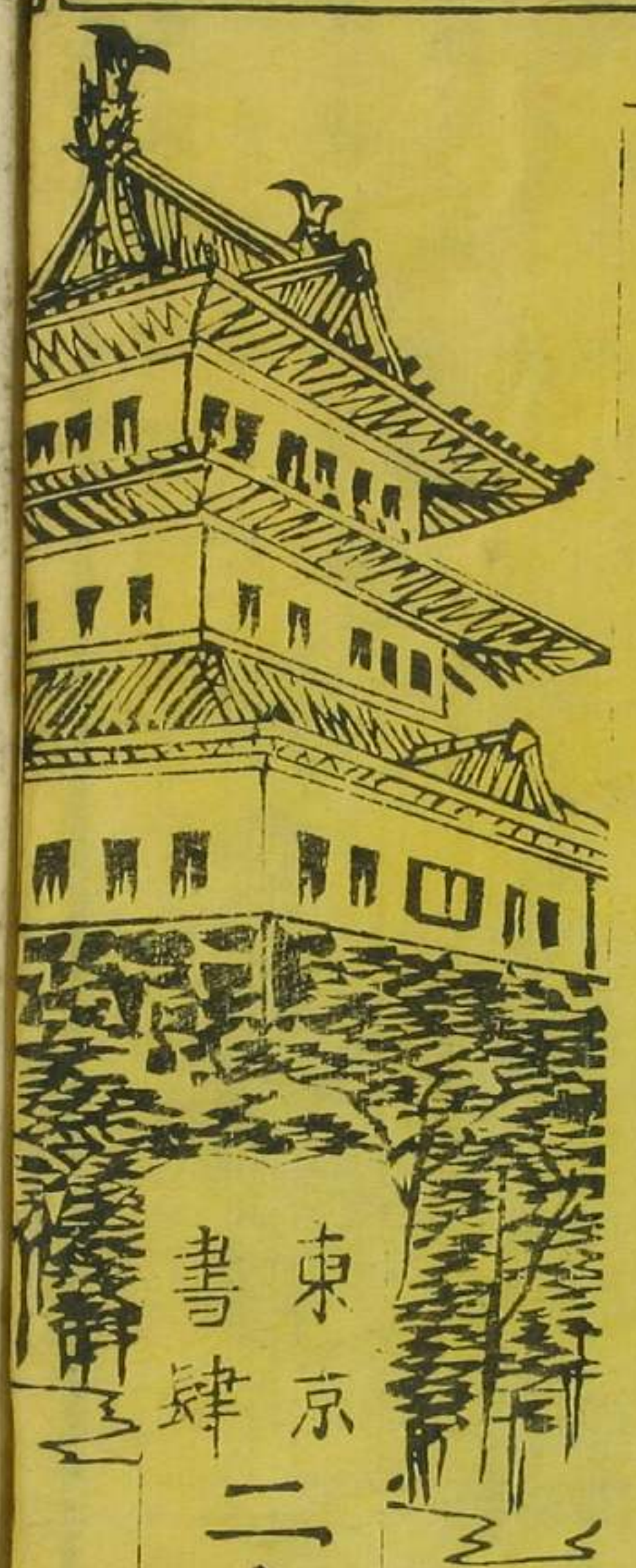
特 14 遠へ門
2504
1-26

櫻齋主人編輯
鮮齋永濯画圖



事 情
明治太平記
初編二冊

東京 二書房共發兌
書肆



天下てんか一回いちかい變遷へんせんもろや諸子しよこの忠憤ちゆうふんもあると雖なほも原もと是こゝ時運ときうん
の然しからしむも如ごとくし尔れをえ元もと弘ひろ建武けんぶの役やくも天皇てんかう高時かうじが暴はて
征せいまり此こゝときに廷臣ていしんもは藤房とうぼうの賢けんりし武臣ぶしんもは新田しんてん楠等くすのぶらりし
ども又また足利あしかがの逆さかを殲せんせし得えず近時きんじ伏見ふしの一舉きよもは於おりし一旦いつたん
錦旗きんきも砲發ぱうはつせしも関東かんとう速すみくは非非ひひを悔くて謝罪しやざいの实效じつこうを顯あらわへ
し其属そのぞく奥羽おくう總野そうのも在ありし姑なほく官軍くわんぐんも抗かうせしも後終のちひも順したがふ
歸きりし曰いは弊廢へいはい止とめ開化かいけも進すすみ衆庶しゆじゆ腹はらを鼓こして太平たいへいを樂あそむ
是こゝ聖運せいうんの至いたる所也なり因よりし少すくく其邊そのへの事迹じせきを記して幼童ちゆうどうも示しす

櫻齋主人記

明治大正巴四編一



明徳天皇御紀

會津中將



明徳天皇御紀

徳川内府公

鳥羽街道に賊錦砲
と等しき徒旗を
發せしむ



鳥羽街道に賊錦砲

卷之壹

慶應三年の冬、徳川内府大政を奉還
 せしより起り、明治元年正月、伏見の戦争
 遂に敗れ、東軍大坂へ走るに終る

卷之二

前同時、徳川氏伏見の敗潰、伝聞き
 軍鑑し、乗トて浪花を走るに起り
 大鳥圭介等の脱兵、総野二州の間
 於て大いし官軍と接戦するに終る



明治太平記初編卷之一

東京 櫻齋主人編

上古の事ハ姑くおたて神武天皇御世を治しめりてより
 以来皇統一姓に在りませバ大政総て王室より出せと言ふ
 事多し
 一 頼朝相州蛭ヶ兒島より起りて義仲を討
 一 平家を西海より沈めりてより國家の政權武家より出る
 一 至り北條の暴戾、足利の兇惡、遂に天下ハ麻の如く煮れ
 一 偶織田氏の英傑あり、豊臣氏の胆略ありて全國の

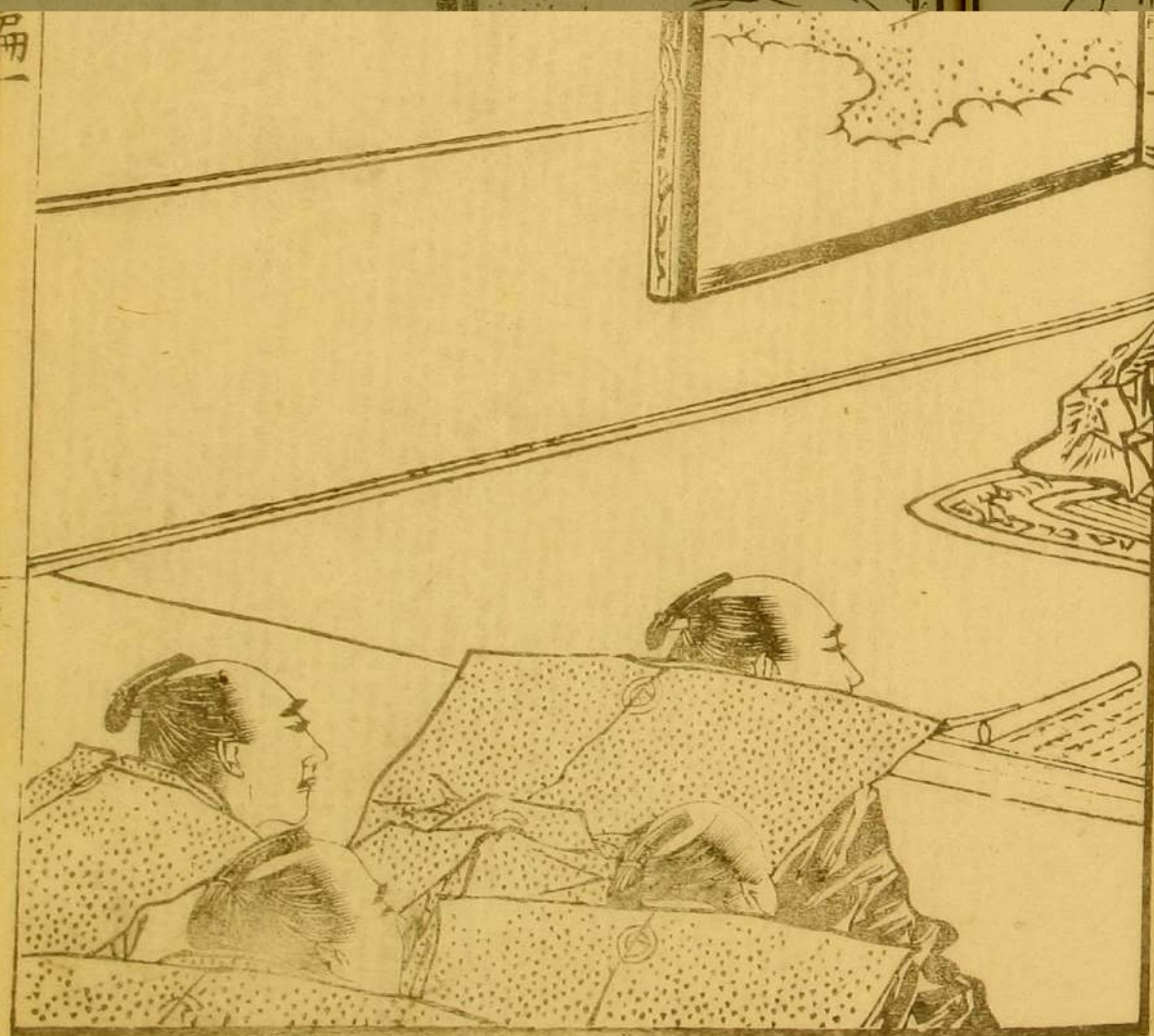
乱を威腹させし又徳川の曩祖家康あり人最も勤
 王の志気厚く四民に仁恵を施さるるを昇平二百
 有餘年靡のぬ草木もたるるそのうら國權ハ尚武家
 一のうらと天子も生る神のごくまきを尊敬するまとな
 雖も皇威ハ更し震いざりし一既し嘉永癸丑の年亞
 米利加の使船渡来せしより幕府等志をく事
 過ち慷慨の義士等世に顯せられし大つし王室の佐
 けをちし大政復古なるさしゆんと頻りし尽力し及び

一うを朝威も日々熾んまり幕威ハ漸次よかとなりて
 大藩よりつらつら幕命を奉せぬも多く徳川譜第
 の藩よむいさハ苦慮する者も尠くは此とれた徳川
 十五世の武将内府慶喜と称するハ頗る英敏の听へ
 りし時山内容堂なる人書を徳川家に捧げし曰く
 中古以来政刑武家よ出るといふも洋船渡来ありて
 うりハ種々内国よ物論生じ終し外人の侮りを受るも
 朝廷幕府と政令の二途より出る人を以て天下の耳目

を異トよまれをあり今や時勢ト一変をせむ只旧規トの
守まもるべくは王室トに還かへり萬国ト並立の
基礎トを立んと是ト當今の急務トなり尚あも御賢
慮りのなきを最懇トろよ認めたる後其臣ト後藤象
次郎ト等よ持たせし將軍家トよまのしせし勸すすめぬ政柄
を解とくあめんとせし是トよよろしく將軍トを深く思ひ
遠とく慮りるよ迎むかへ是ト迄の姿トを治おさめなきよ
ひと察さし大政トを朝廷トに還かへり奉たらん赴おもき代ト譜第トの

將士トよ談だんぶらよど會津トをたどり將士トの面々ト大おのよ
あま紙ト駛かきし心中トそめ意いよ服くせざれども陽あに拒こむ
竟とを得えず然しかるなき旨ト吞のへし徳川内府トも決心
せられ慶應三年十月某トの日書トを朝廷トに奉たりし
將軍職トを返かへさんと請こはる仍なく朝廷トあまを許ゆるし尚
も諸藩トの意見トを詢たる此トとれ徳川家恩顧トの諸侯ト
或あハ輕易トよ政まつを執とるとかく姑なく内府トよ御委任トの
く然しかるなきを建自トよ及およべを朝廷トにまづ遅疑トせ

徳川内府辞
 職の書と作
 りて譜第の
 将士示一
 意見と詢ふ



られぬ然るも徳川内府の尹の宮且つ二條
 親と深き故に徳川の僚属等関白家と密
 仍も朝議の決しごとくと言ひ出る者ありし
 正義の朝紳及び薩州土州をとり豫て復
 諸藩士等相議して云く天下の吏稍定ま
 朝議斯のいごとくハ機を失ふに至るべし
 大の奮発ふ激論をりて朝論を動
 九日に至り遠く朝命ありせられり會津の

関白と最も
 山議を合ま
 是はあつて
 古の議と起
 んと
 と何を
 更十二月
 九門宿衛

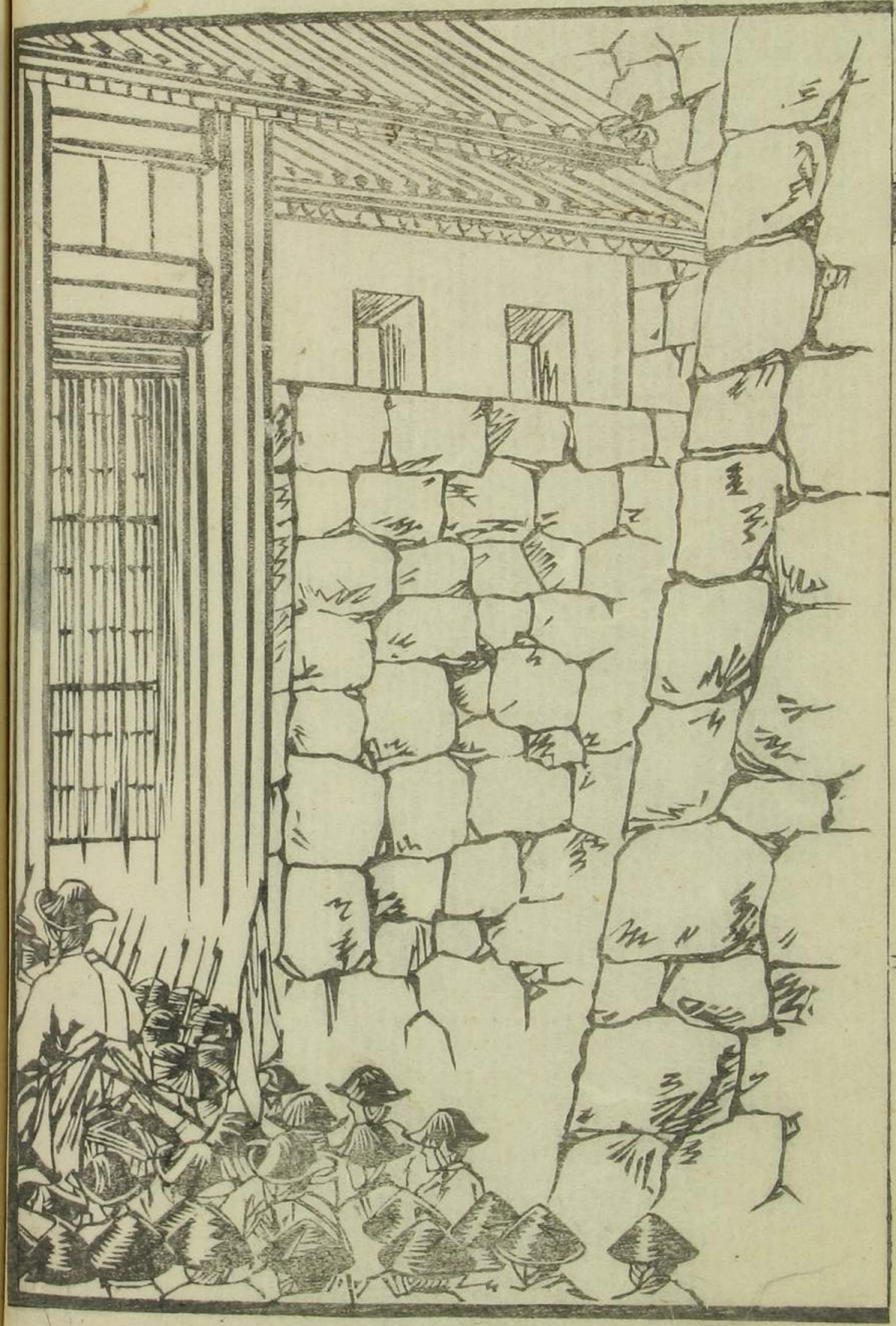
を罷め薩土藝の三藩あれ代り尹の官且
 斥け関白及び幕府の職を廢して仮り
 參與の三職を置き宮及び公卿諸侯藩
 其職に任とり以て諸政を掌とせしめ且
 云く今より大小の政務盡く朝廷より
 其之を體せよとあり是より先毛利家
 京を禁とられ三條家以下六卿の勅勅
 て久しく長州に在せしが固より正義誠実

つ二條家と
 總裁議定
 士等をして
 つ令し
 出れば四方
 政ありて
 を蒙られ
 皇国と

思ふ赤心より事起りたる訳を遂に朝疑氷解
 しく毛利家且つ六卿も此頃京師に召さる
 原の官爵も復せしむるに程は徳川内府もかの
 九日の朝命を聞くより心中をなやみ駭き
 怨望を懐く之意あり仍も會津以下譜第の將士を
 二条の城に召集め相議しと言ひやう既に此程
 將軍職を辞退し及ぶとつども全く国事は關係を
 致さるるの身分より然るは九日の朝命出ると斯の

如き大事件を我に一言の詢もなく突然とて令を
 出はる是必らば幼帝を騙り一変を謀る者なりと
 覺ゆ果し然る事なりと於て又是天下の一大事な
 れを阿容くく在るべきあり我も事を執る
 べし其趣きを申し述べ再び朝廷に上書するを
 既に内府政權を朝廷に奉還為さざり又此表の出
 たる成世の人た疑へり是より仍も薩長等の諸藩
 非常の備へを嚴重し固く宮闈を守護せむ

朝議の變
 徳川の譜
 第の將士
 二條の城
 據る



日本書紀卷之四十一

日本書紀卷之四十一

九

徳川譜第の將士等
まろの勢いあるみぞ洛
方向は悩めるも生かす
或ハ内府に勸めて曰く
さくハ奈何ある變の
掛らんより浪花ハ京
坂の城に據る事
内府も然るべし

たれ下坂のいと唱へた
會津素名の兩藩を
各兵士を従へり同月
下られたり朝廷あれを
察し會津桑名兩藩
後ハ事もなく姑く時
議定參與等相との
かいつ政を執るといふ

城のく二条の城に據りて相對
騷擾を以て諸藩のうらみ
くるべし余れバ徳川の將士等を
事己は斯のごとを形勢に至
ゆらんも知れ居るる畏
師の咽喉の地をれば互に大
凶を以て上策ありんと爰に於て
思はらん臣下の暴動を鎮む

一通の書を朝廷に置き
閣老板倉侍従等と共に
十二日の夜より大坂に
召され其奉止の異なるを
入京をふん禁せらる斯り
を送る程は京師に
謀りて曰く今既し王室に
費用を克べきの物なり

亙とら亙とら徳川氏とくがわしは課かして八百万石の土地を割きり其餘そのよ
 の諸侯しよこうも大小おほせうは従したがひ其幾分そのいくぶんの一ひとをふ割ききて土地人民とちじんは
 貢こうはせし夫そのとは就つて徳川内府とくがわうちふを議定職ぎていしやくの列りは加くへ
 事を議ぎるぞ亙とら亙とらかんと馳ちて尾張大納言おとぎだいなごん越前宰相えちぜんさいしやう
 詔みことりしく大坂おほさかは赴おもむくむ仍なほく両家りやうけは浪花城なななぎはつゞ
 具もは朝旨あさむねを宣のたまはせし人更ひとさらはま言いはせし朝あさ廷最ていさいも
 懇かんろは内府うちふを召めさせめくるうらへ聊なほう御心ごこころは狭せまむと
 めく亙とら亙とら小隊せうたい怪装けいさうはく入京いりきやうはるるを然しかるべしれ

倘夫しやうととをも憐あはれむる我々尾越おとぎの兵へいをりめと奈何いかん
 ふも守護しゆごしきつせんとなり是これは依よる内府うちふも陽やうは
 其他そのたふたは辨わべ朝旨あさむねを奉たてまつはると雖なほも陰かげりふその
 説せつを疑うたがふみぞ其夜會津そのよあひつ以下の將士等しやうしらうを大坂の城おほさかのしろは
 會合くわいごうふさしめ事の次第しだいを物語りて衆客しゆかくの主意しゆいはつふと
 問とへば將士等しやうしらうは眉まゆを頻ひん卑ひめ尾越おとぎ両侯りやうこうの言いはるるを
 輒ふしく信しんぎなきはゆき主しゆ公京師きやうしは行ゆめをんとあり臣しん
 等ら何れも死しを決きしつゝあれは従したがひまのせんと言いは

内府あひふ 驅くとを 毛花けはな 羽は兩道りやうだう 入京いふきやう 勅ちくの罪つみ

心決こころぎして遂つひに會桑かいそう兩藩りやうはんをめりて先まづも入京いふきやうをまきよ事極ことごくまるみぞ此この支速しやくくは聞きては騷動さうどうのゆゝも大方おほひありて朝あ廷ていには薩長さつちやうのりやうはんのへいをろくふ外がへは出いでし伏見鳥ふし見とりのを塞ふぎに内府大軍あひふたいぐんをありし登のぼらんとせば必かなずに入いりしむとむ殊ことに會桑兩藩かいそうりやうはんのをたらして豫よを禁いじりたりし渠等先隊みちらうせんたいをありし進すすむに於おこしハ違ちがひを免まぬにはし終はつて機きをありし臨まりし變かへりしに依よりて處置ちよじをます

引ひ俱ぐ 時ときよ 間ま近あい 高松たかまつ 應接おうげつ 西道さいだう 糸いと

日命ひのみことトらるれを薩長さつちやうのりやうはんのへい許多あまのへいをありしつのかの西道さいだうをありし走をむに防たう衛ぎのへい備そなへし嚴重げんじやうありし治元ちげん年正月三日ねんしょうげつみっか徳川内府とくせんあひふ入京いふきやうしし佐久さく久保田備前くぼたへいぜん等らをありし三兵隊さんへいたいをありし引率ひんそつをありしめり濱田はまたをありしめり其その餘ありし譜ふ第だいのしよ諸侯しよこうをありしめり兵へいとありし會津かいづ桑名そうなをありし先鋒せんぽうとありし伏見鳥羽ふし見とりのへい大軍たいぐん陸続りくじやくとありし進すすむに来きりし固かくし関門せきもんをありし入いりし徳川家とくせんけよりし使者しやをありし送おくりし関せきをありし通とりししし

東軍使者
を送り
関門を過
らば
論ぞ

月台六丁巳初編一



日シノ方ニ言不終一

一四

一五

詰と成兵更之を許さば種々論談及び一々
 件の使者の言へるや寡君朝命を被りて今入朝
 及べり成和殿等敢て拒むとならば此上も是非
 及べり兵を用ひて過らんと云ひ捨て退き一が既
 一々徳川の大兵忽ち関門に逼るふぞ京軍事の
 急なるを見と大砲を發し一防ぐ程も東軍より
 銃を放ちて稍撃戦及ぶるを砲声山野に響き渡
 る最まさまどき形勢もまると先隊も兵端を

開きたりと覺しなを進めや者どもと勵ま合ひと東
 軍漸次は押蒐は京都方より薩長の兵士等只一
 揉よ追崩せと最も烈しく討立たるや一追の東軍
 找より前隊乱れ敗走せり此より伏見の火の
 起りて民家熾んよ燃ゆるに此機に乗じて関
 東勢は又兩道より攻上り是非に入京なさんと
 京軍は追退ると双方憤戦時を移せを死傷の
 者も尠くは兎角もうち日昏に至れば兩軍合

引よ兵を上る姑く休息よ及ぶ程よその夜三鼓よ
 及べる頃うぬる京軍より入るとおくとその一つの
 間者立飯りる只今東軍下鳥羽りる夕飯を支度せ
 りと注進よおとびる先や其虚を撃んとて京軍不
 意よおし寄せつ襲撃するると急ある故東軍大い狼
 狽ふ兵器を棄る敗散せしぐ此とて関東方遊軍の
 兵夫と見るより援けしるを敗兵あると勢ひ得て各
 返し戦ふると京軍あるとが為よ乱れ立ちしを隊長

市木某等頻りよ兵士を激しし自ら真先よ馬と進
 り勇を振ふる戦ひしるが東軍再び破れし然れ
 ども市木をたどめ京軍多く討死為たるとバ馳て兵
 を引りしとて斯て四日る辰の刻より西軍鳥羽
 伏見の両道より又血戦よ及ぶ程よ豫て京軍の
 方より散兵を數十人鳥羽街道の傍ある高草
 の中よ伏せおたると敵の来り窺ハしむ東軍は
 是れ知らむしと大挙なりし両道より逼れば

此と云総督仁和寺の

宮より錦の御旗を

真先よおし立

諸軍を指揮

して進まうを

関東の賊軍ども

更し憚る気色もなく

打出す弾丸の既し錦



旗よ中るきを勢ひ猛く

攻寄せたる時をそのやそ

京方の伏兵かの高草の裡より

賊軍の中央を目がけ一時は撃出さ

砲玉ハ雨を注ぐよ異あつて

賊兵大よ駭きを驚く者数と

知らぬ此機よ棄れり本道の

官兵頻りよ奮激をうりつを餘しハせどと攻め蒐



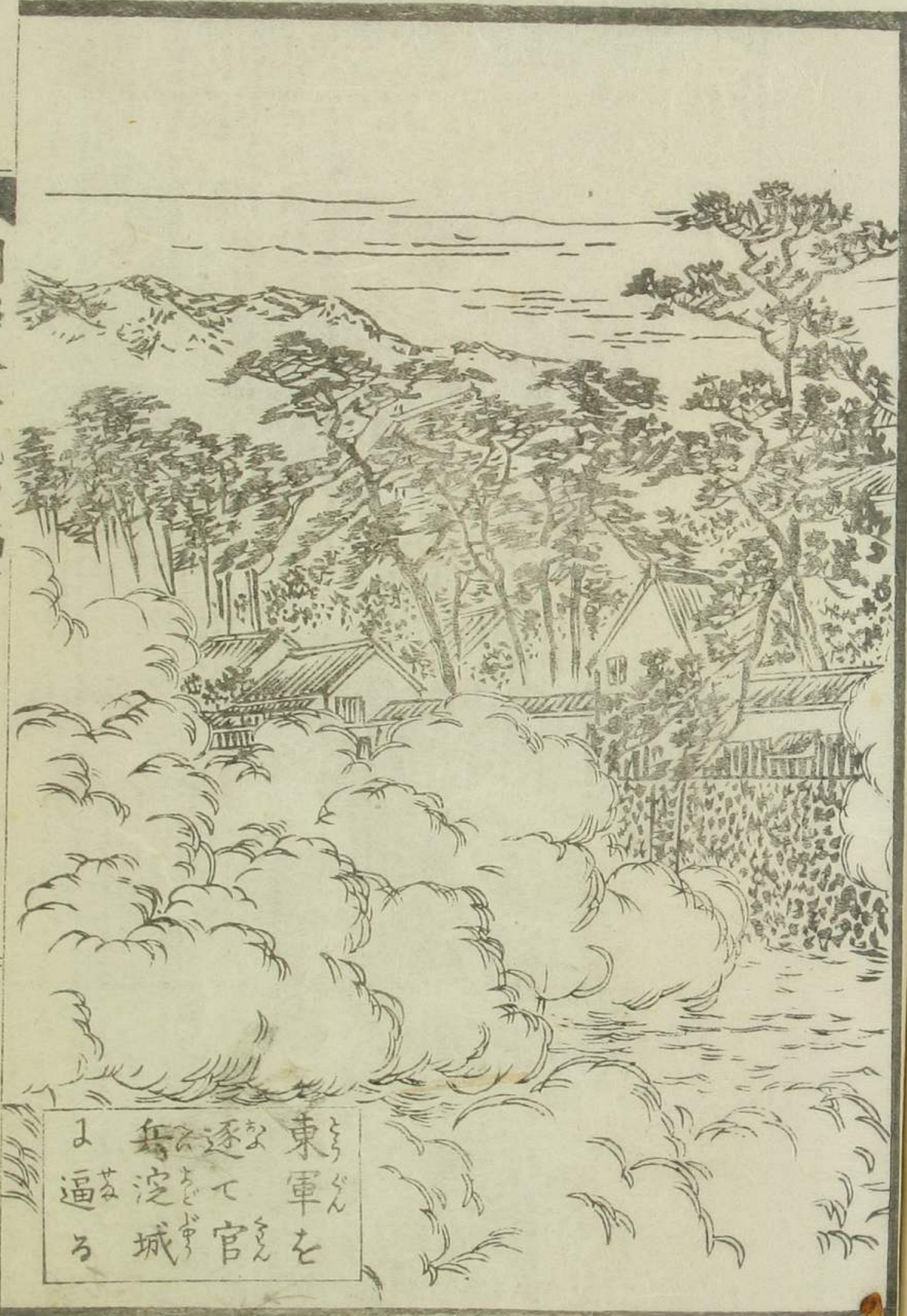
とる賊軍遂に堪り得ず
辛く淀舟を退り此日賊
数十名討死し官兵も
多しゆき備五日より早天
く賊兵橋を隔り頻り
くも川向ふより大砲数
がけく打掛たり此とを賊
百人をのろを芦の茂り

を出して敵を四引寄んと
しき動静を察せしを猥
砲戦し時を殺すを隊長
焦燥く敵に伏兵ありと
し世の物笑ひ成奈何よせ
砲手数人を引俱しと直
敵に撃てかきとバ官軍大
と先を争ひ進みたる時

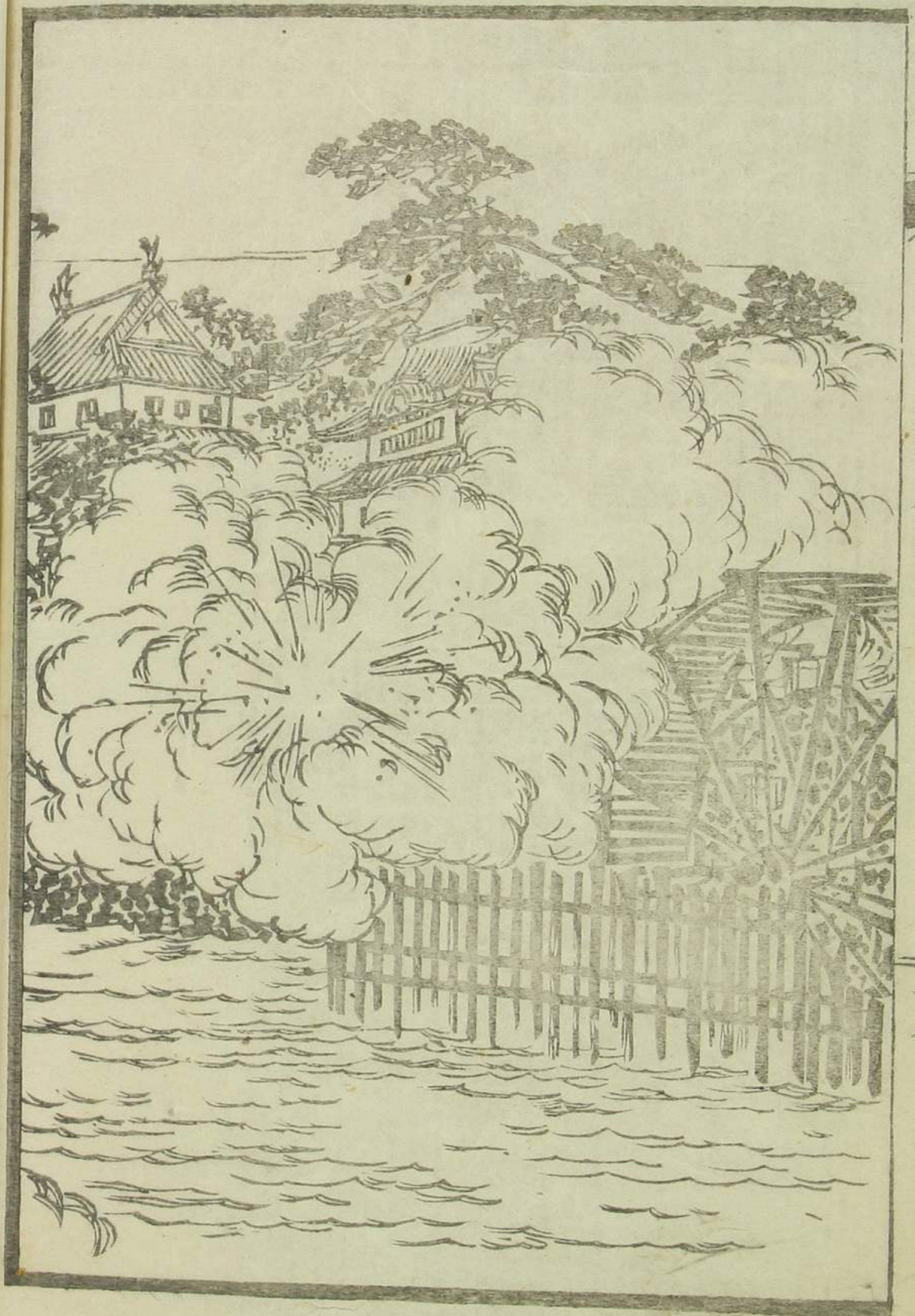
月台大平巴口編一

鳥羽の人家に火を放ち
将佐久間久保田等以下
加治木以下死する者最
り官軍淀より来り攻む仍
防禦の手を尽せ官兵
發はけさぬよ淀城目
軍方畧を設け槍隊凡
下は伏せし更し小銃隊

官兵速くも伏兵の
り兵士強進ませむ只
川某あり者大に声を
弁を憚る機を失
我よつかけと言ひつ
橋を渡り越し群
奮ひ立ち夫石川を討
分はりと賊の伏兵左



東軍を
逐て官
兵を定
る城



右の芦の茂より忽然と露くれ出槍先揃へて突く
 蒐れど豫く期したる莫ふは石川某些とも臆せ
 左右よりて戦ふほど賊の銃隊大つに至りて透間
 も在らせず打立しく遂は先鋒石川等ハ弾丸よ
 中りて斃となり尔れども隊長柳田伊集院その
 他勇猛の兵士等が頻り味方を励まし死憤の
 色を顯はしく無二無三進ししを賊軍あはを
 走へ敷く散々討ふされ堪へず大敗軍となり此

日午の刻に至る頃賊兵は退き橋本よあん至
 甲しとて時津藩東軍の為山崎の関を守ら
 折りて天使山崎に至りて順逆の理を陣諭す仍
 津藩命を奉とく官軍は順ひて賊軍いしむ
 あはを知らず既は六日の早天より官軍橋本
 押寄せしる賊軍も兵を出して稍戦争し
 及べるとき津藩忽ち山崎より賊軍の陣營に大砲
 數發ち蒐しる思ひ設けぬ莫あらずは賊徒等

大坂
 狼狽し討つ者数を知らざ
 るらく本道の官兵勝り乗とく頻
 りし心を矢猛りとやまども盛
 遂に賊兵総敗軍とありける大坂へ

治太平記初編卷之一終

治太平記

自初編櫻齋
 追々出板鮮齋

國屋俊と魂

彩色入戲墨
 追々出板孟齋

日吉町

武藏屋真

日本橋通三丁目

延壽堂

丸屋鉄次

月台太平記編

